

## 新薬や医療機器の開発が医学を前に進め、国を支える産業となる

薬物療法・神経内科 臨床薬理センター 教授 野元正弘

日本の産業は、約40年周期で戦争や経済危機を乗り越え発展してきました。文明開化以降、資源の乏しい日本の産業界は加工貿易を重要視してきました。医療の分野では薬は海外で生み出されたものを輸入すればよいと思われてきました。しかし、現在、日本産業の主力を担ってきた電気機器・自動車産業は海外に拠点を移しており、それに替わって、これからの40年、その中心を担っていくのが医療・健康産業です。日本は、産業革命後の加工貿易から研究・開発に力を入れてきたイギリスなどのヨーロッパを見習い、医療・健康産業を発展させなければなりません。これらの産業の進歩が日本だけでなく世界を含め、国際的な社会貢献へと繋がります。海外での研究・開発によって生み出された薬を導入すればいいという意識を替え、新しい治療法や薬の研究・開発を日本で行い、医学と薬を進歩させていく必要があります。

愛媛大学は、国立大学の中では最も早く、薬の研究・開発専用の病棟を2010年4月に設置しました。私の所属する薬物療法・神経内科では、患者さんの協力の下、この病棟を使って新規の治療薬の開発や既存の薬の安全な使用方法について研究しています。薬の開発には短くても10年はかかり、膨大な資金やマンパワーを必要とします。施設が設立され、当時試験を始めた薬が、現在、第Ⅲ相試験と呼ばれる検証試験の段階にあり、あと3年ほどで実際に患者さんに使うことができるようになります。また、第Ⅱ相試験の段階の薬もあり、日本をはじめ世界でも広く使えるようになる薬が愛媛から発信できる日も近いと思います。

薬の進歩が医学の進歩であり、結核がよくなったのも、現在がんが治る病気といわれるのも薬のおかげです。もちろん手術や医療機器も進歩していますが、医学研究のゴールは治療薬が中心です。だから、いい薬を作るということが医学を進歩させるのです。

当院の役割としては、そうした先端医療の結果を日常の診療に還元することです。先進医療を生み出すとともに、それを連携病院へ広げていくという役割があります。このために当院と人事交流のある愛媛県内外の病院とともに連携病院長会議を開催しており、その中の先進医療協議会での情報発信・共有も大きな責務だと思います。



### PROFILE

のもとまひろ◎鹿児島県出身、群馬大学医学部卒業。1986年～88年環境庁国立水俣病研究センター医長。90年から、鹿児島大学医学部准教授。2001年から同職。専門領域は薬物療法・神経内科学(臨床薬理学、神経内科学)。趣味は空手(第15回東医体個人優勝)、山登り、今年は北アルプスに挑戦する予定。

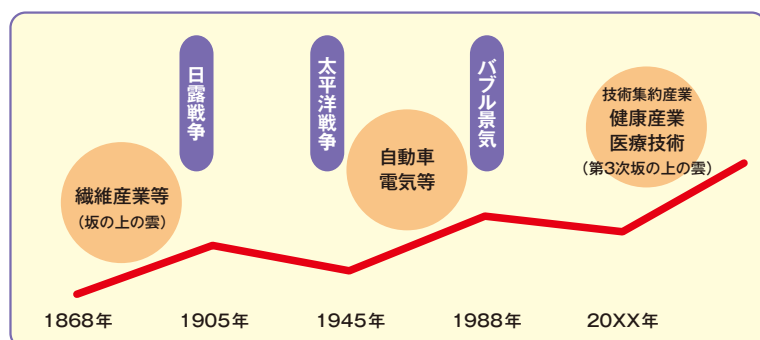


図1: 40年周期で推移する日本の産業

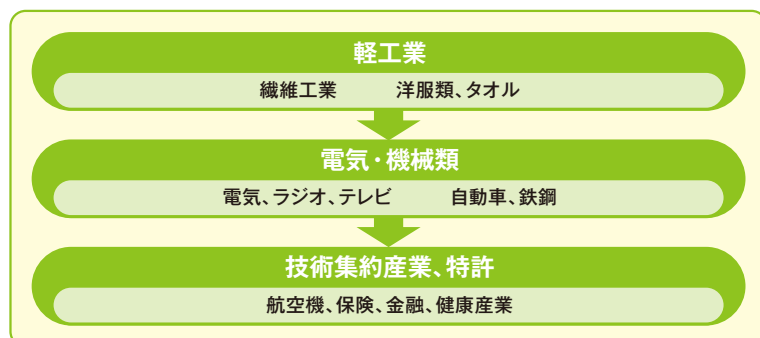


図2: 主となる産業形態の移り変わり



当院3号館の臨床薬理センター



薬物療法・神経内科 LC/MS/MS